

The Japan Weekly Mail., Sept, 25 1880. p.1,241-1,2 42

ジャパン・ウィークリー・メール 1880(明治13)年9月25日

9月22日(水)の晩はブラフ・ガーデンズ*で愉快的ひとときを過ごした。日没の頃は、蒸し暑くて雲が垂れ込めていたため、雨が降りだすのではないかと心配された。だが、9時にはきれいに晴れて、オーベールのオペラ《王冠のダイヤモンド》序曲の甘い旋律をいまかいまかと待つ多数の聴衆を、月が照らした。

バンドマスターのメイレルス Meyrelles は時間通りにコンサートを開始し、感じのよいこの序曲を見事に演奏した。戦艦リッチモンド**のバンドは、評判通りに優れた演奏を聞かせてくれた。彼らの力量に見合ったのはこの曲だけだった。残りの4曲はワルツやポルカなどお馴染みのバンド作品で、いつものように立派な演奏であった。

日本人のバンドは意欲的にも、マイヤベーヤの2作品のような難曲に取り組んだ。そのうち《ユグノー教徒》抜粋は確かによい演奏だった。幅広い全音階のコラール *broad diatonic Chorale* は、他の曲と同様の遅いテンポ設定がふさわしかった。だが、スッペの序曲はテンポが遅すぎて、始めから終わりまで崩壊の危機に晒された。最後に演奏された[コンツキの]〈ライオンの目覚め〉は、葬送曲のようなテンポで演奏されたがために皆殺しの様相で、正しくは〈ライオンの死〉と称すべきではないかと思わされた。

どうしてこんなにテンポが遅いのだろう? 日本人は速いテンポで演奏できないからというわけではない。そのことは、かれらが後でリッチモンドのバンドとシュトラウス[Jr.]の〈インディゴ・カドリーユ〉を共演して、素晴らしい演奏を聴かせてくれたことからわかる(指揮はバンドのメンバー)。ひょっとしてエッケルト氏の腕はそれ以上に速く振れないということだろうか? もしそうだとしたら、われわれは芸術の名において、彼にその力んだ身振りをやめるよう懇請したい。せつかくの良い演奏でも、彼が上下左右に大きく腕を揺らして拍を刻むのを見ると興ざめしてしまう。もし彼が自分の指揮姿を見て、他の指揮者のコンパクトで正確な指揮ぶりを見比べることができたなら、われわれの言わんとしていることの正しさを認めてもらえるだろう。

良い演奏だったのは、最初の序曲〈インディゴ・カドリーユ〉、《ユグノー教徒》抜粋、合同バンドによるギャロップ、マーチ、フィナーレである。合同バンドによる豪華な演奏により、夜のコンサートは華々しく終了した。

3曲を指揮した日本人(残念ながら名前を聞けなかった)には最大級の賛辞を送りたい。彼は立派で上品な振る舞いと軍隊的な正確さによってバンドをコントロールし、際立った成功を収めた。

願わくばリッチモンド出港前にもう一度、合同バンドの演奏を聞く機会があらんことを。それと、電飾が美しかったことを忘れるわけにはいかない。フート Foote 氏による提灯を用いた電飾はたいへん見事で、これまでに見てきたものよりも効果的であった。

*Bluff Gardens:

http://www.baxleystamps.com/litho/meiji/usnh_yokohama.shtml
(http://www.baxleystamps.com/litho/meiji/usnh_yoko_map-1.jpg)

**USS Richmond:

[https://en.wikipedia.org/wiki/USS_Richmond_\(1860\)](https://en.wikipedia.org/wiki/USS_Richmond_(1860))